説教要旨『安心して絶望できる人生』

フィリピの信徒への手紙　３章１～１６節

『安心して絶望できる人生』というのは、クリスチャンである向谷地生良さん（北海道医療大学教授）らが設立した、精神障がい者支援事業「浦河べてるの家」の理念です。その理念が生まれた背景には、どれだけ病気やトラブルが解消したとしても、生きていれば再びそれは姿形を変えてやって来るのであり、リスク回避に終始することが、根本的な安心をもたらすものではないという当事者達の経験がありました。むしろ、人生のなかで絶望するような時はあるものだという前提に立って、それとの向き合い方をこそ養っていこうというのが先の理念の中身です。その際に肝心なのは、神を信じるが故に、「私達が決めることや目標とすることは、移ろいやすいものであることを知っておくこと」、「人との出会いや与えられたものの確かさを知っていくこと」、「どんなに目の前の現実に希望を見出せなくなってしまうような時でも、きっとその事が何かまた新しい意味を生み、新しい人のつながりを生むはずだということを、もう先に信じてしまうこと」であると向谷地さんは語ります。

フィリピの信徒への手紙を記したパウロは、これから記す内容が「あなたがたにとって安全なこと」であると言いました。彼にとって、自分が「ベニヤミン族の出身で…律法に関してはファリサイ派の一員、熱心さの点では教会の迫害者、律法の義については非のうちどこのない者」であったことは、当時のユダヤ社会において自分の存在価値を証明してくれる安心材料であったはずです。しかし、彼は「わたしにとって有利であったこれらのことを…キリスト・イエスを知ることのあまりのすばらしさに…損失と見なすようなった」と言うのです。

パウロは、誰もが羨む社会的な肩書きや業績や能力にではなく、主イエスを死から復活させた神に、人間にはなす術のない「死」さえも克服することがおできになる神にこそ「安全なこと」を見出しています。彼は、見えるものは移ろいやすく、過ぎ去るものであること（Ⅱコリント 4:18）を知っていました。たとえ自分に有利なものを失ったとしても、既に「キリスト・イエスに捕らえられている」以上、そのキリストのなかにこそ揺るぎない自分の存在価値や希望を見出せることをパウロは教えてくれているように感じます。主イエスを通して示された神のみ業を信じるが故に、どんな絶望的状況においても、「前のものに全身を向けつつ、神が…お与えになる賞を得るために…ひたすら走」れる道が拓かれていることを、監禁され（1:13）、「すべてを失」ったパウロが、身をもって私達に証してくれています。

（文責：望月達朗牧師）